

# 「てつがく創造活動」評価部会

## 1 研究の内容

### (1) 「学びをあむ」における評価

「評価」という言葉のもつイメージは多様であるが、本研究で提案する評価は、点数づけではない。ふり返ることを通して、自分や他者を知る行為であり、「学びとしての評価 (assessment as learning)」である。「てつがく創造活動」では、社会の変化と主体的に向き合う市民を育成するため、自ら学びを構想し、主体的に学ぶことで、メタ認知スキルや社会情意的スキルを育成することを目指している。評価においても子どもが主体となることが、「学びをあむ」教育課程には欠かせない。子どもが自身の学びの評価者となる「学びとしての評価活動」では、子どもが自らの学びを調整し、ふり返り、次の学びをつくりだしていく。その場にいる友だちの言葉や行動もまた、「学びとしての評価」には欠かせない。その意味で教師もまた場の一員として、評価活動を支えている。このような自己評価と相互評価により、子ども自身が学びをあんでいくための評価のあり方について考えてきた。

### (2) 研究の履歴

これまで、子どもの学びにおける姿を語ることで、子どもが自身の学びの評価者になることについて、様々な取り組みを共有しながら、そのあり方を探ってきた。

研究の1年目は、自己評価をするときの観点を子ども自身が考える実践を行った。子どもが行ってきた様々な学習でのふり返りの経験を生かし、自分の学びをふり返る観点を選択した。出された観点を全体で吟味することで、子ども自身が自分にとってどのような観点が必要なのかを考えるようにした。

2年目からは、子どもが自分の学びをふり返るための方法をより具体的に探ってきた。そこでは、「てつがく対話」が、「プロジェクト型活動」の中でどのような機能をもつかが次のように明らかになった。  
①活動を始めるにあたって向かうべき問い、②活動の途中で立ち止まり考える問い、③活動の終わりにふり返り活動の価値を考える問いについて対話が行われることである。

3年目には、子どもが自分のふり返りを可視化できる方策はないかと考えた。一人一台端末を使って教師や子ども自身が活動の記録を残す試みを行った。この試みは、自己評価だけでなく、相互評価も促すことが明らかになった。このような評価活動には、子ども同士のかかわりが重要であり、そこに“てつがくする”ことが存在すると考えた。

4年目は、子ども同士の評価活動とそれを促す教師の評価活動についての実践を重ねた。その中で、活動している子どもたちの変化を捉え要因を探ったところ、「木でいうと、枝分かれしていく場面」「分岐点のようなものがその子の学びに見えたとき」に、どちらに伸びていこうと構わないが、そこで一度立ち止まらせるための教師の働きかけや子ども同士のかかわりが大切であることが見えてきた。

これまでの研究から、「学びとしての評価」は、子ども一人ひとりだけでなく、そこにかかわる子どもたちという広い輪の中で捉えていく必要があることがわかった。

### (3) 今年度の重点

今年度は研究のまとめの年である。これまでの研究を生かし、子どもが“てつがくする”ことを通して、「学びとしての評価」を行う。そして、将来にわたり、自らの学びの評価者であり続けるために、このような評価活動に価値を感じ、自覚的に行う姿を目指す。

#### ①関係全体の深まりや広がりをもとめる

「学びとしての評価」は、一人では完結しない。子どもが自分のふり返りをするとき、友だちの取り組みやアドバイスを見聞きしながら刺激を受け、次の学びにつなげている。また、自分も友だちに

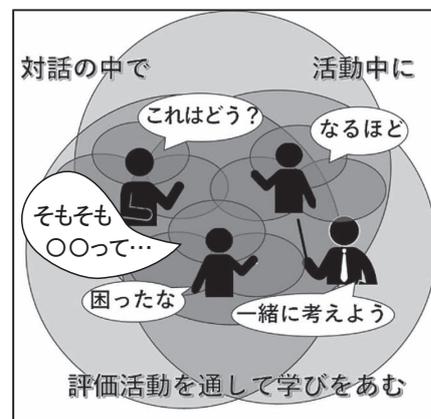


図1 学びとしての評価

とっては他者となり、刺激を与えている。教師も、子どもに刺激を与えると同時に、子どもから刺激を受け取っている。図1のように、子どもと教師がともに評価活動を行いながら、それぞれの学びをあむことで、学びへ持続的にかかわり、関係を豊かにすることを目指す。学びが進むだけでなく、戻ることもあるだろう。教師は、学びの深まりや広がりについて、個だけでなく、関係全体をみとることも必要である。

### ②子どもが自覚的に行うために価値づける・つなげる

このような評価活動は、これまでの実践ですで行われてきた。今年度はそれをもう一步進めて、それぞれの子どもにとって評価活動が価値あるものとして自覚的に行われるようにしたい。では、自覚的に行うとはどのような姿か。子どもが、これまでの経験をいかして、「今までの活動はどうだったかな」「友だちの考えをきいてみたい」「何かアドバイスできるかもしれない」と、てつがく創造活動だけでなく、他の教科等の学習や生活の中でも自覚的に考えようとするを、「学びとしての評価」活動と捉えることができる。用意された場でふり返りを繰り返すというのではなく、子ども自身が自己評価や相互評価を意味あることと捉える姿である。そのためには、点で行っている実践が子どもの中で線としてつながっていくことや、「学びとしての評価活動」により起こった出来事に対して、子どもが意味を感じる事が重要である。本研究では、複数の場面にまたがる評価活動をつなげ価値づけるとともに、一連のものとして提示したい。

### ③教師のビジョンを明らかにする

ここまでで、教師には二つの役割があることを示してきた。一つは、子どもとの関係の中で、場の一員として「学びとしての評価」活動に参加する役割、もう一つは、子どもの学びに伴走してふり返りの場を設けたり、他の学びの場とつないだり、関係全体の中での子どもの姿をみとって、より効果的な評価活動が行われるように演出することである。特に後者は、それぞれの教師のビジョンが重要である。では、そのビジョンはどのように導き出されるのであろうか。今年度は、教師自身がどのようなビジョンをもちつつ活動に伴走しているのかについても提示したい。そのために、教師どうしのインタビューや対話を行い、「なぜそのような場を設定したのか」「このかかわりの裏にどのような意図があったのか」などを教師自身が“てつがくする”ことを通して自覚し、評価活動におけるビジョンとみとりの質を高めたい。そして、子どもの姿と合わせて提案し、「学びとしての評価」の全体像を示したい。

## 2 授業実践から見た子どもたちの姿 実践者から

### (1) 第3学年 活動のふり返りとしてのサークル対話

3年生から始まった「てつがく創造活動」におけるプロジェクト型活動では、低学年からのボトムアップとして、一人ひとりの興味のあることから立ち上がり、一人または友達と複数で活動を進めていくことを続けてきた。4月末、プロジェクト型活動では、これまでの経験からやってみようことをすでに構想していた子どもも多く、「魚つり」「イルミネーション」「小説」「しぜん」「書道」「カフェ」「はっくつ」などさまざまなプロジェクトが立ち上がった。

さらに、プロジェクト型活動のふり返りの場として、サークル対話も継続して行った。ふり返りは、まずは、一人ひとりが「取り組んだこと」と「思い」を絵や文で表現する。その後、サークルベンチに集まり、その日に取り組んだこと、次の時間にやりたいこと、うまくいかなかったこと、困っていることなどをプロジェクトごとに伝え、質問する時間を設けた。聴き手からは、作り方など活動に対する質問、あそぶデー（学期末に行う、プロジェクト型活動を共有する場）で何をしたいかなど、活動の詳細や、見直しに関する質問、困っていることへのアドバイスが自由に話される。全てのプロジェクトが毎回話すことはできないが、このような対話を4月末から継続して行ってきたことで、他者のことばを通して、少しずつ他者の活動への取り組みに触れようとする子どもたちの姿をみとることができた。

#### ①他者のふり返りから、自分の思いを見つめ直す（3年生1学期 はっくつプロジェクト）

##### (i) 思いをもって活動し、表現する

「はっくつプロジェクト」のしゅんたは、1年生のときからの宝石や石に興味をもっており、1年生では「ほう石プロジェクト」において、宝石について調べたり作ったりしたという。2年生でも宝石につい

て興味を持ち続け、これまでのプロジェクトを紹介するカードには、「本ものみたい」というしゅんたのことばが何度も出てくるほど、本物にこだわって作っていたことがわかる。

今年度は、宝石から化石などにも興味を広げ、「はっくつプロジェクト」として活動を始めた。すぐに工作用紙を使って、発掘に使用するスコップやハンマーのようなものを作り始めた。ふり返りには、「ざいりょうは紙とテープです。道具の先のほうがやわらかくて土に入りやすくくふうしました。」「おのみたいなどうぐを作りました。は（刃）は短いと長いのです。いろんな場合でもたいおうできます。」と書かれており、実際に土が掘りやすくなるように、柔らかさや長さを工夫したことがわかる。活動の様子からは、柄の部分にラップの芯を入れ、工作用紙でつくったスコップを持参したビニールテープで巻いたりするなど、その強度にもこだわっている姿が見られた。出来上がると、「見て見てー。」と友達や教師にもその説明をしたり、休み時間にも発掘道具づくりを行ったりすることもあった。ふり返りのサークルでも、実物を見せながら、道具について嬉しそうに話すしゅんたの姿に、クラスの友達からたくさんの質問や「触ってみてもいいですか。」などの声があがっていた。

### （ii）他者への憧れから自己を見つめる

「神社プロジェクト」のいつきは、もともと電車が好きで、4月には工作にかかわる活動をしたいという思いをもっていた。立ち上がりの時期には「神社プロジェクト」に入り、友達と相談しながらおみくじやさいせん箱を作り始めた。さらに、「抽選のガラガラ」がうまく回るよう工夫して工作用紙で作り、出来上がると嬉しそうに何度も回して見せてくれた。

毎週のふり返りにおいて、自分のつくった発掘道具についていきいきと語るしゅんたの姿を、身を乗り出して聞いていたいつきは、6月、「プロジェクトを変えてもいいですか？」と質問した。聞くと、「はっくつプロジェクト」に入りたいと言う。しゅんたのつくる発掘道具を自分も作ってみたいといういつきの思いを聴き、工作をしたいという思いを貫きつつも、しゅんたの活動に魅力を感じ、ともに活動したいといういつきの思いを、教師は受けとめた。その後、いつきは「はっくつプロジェクト」をえらんだ理由について、「いつもかっこいいどうぐをつくっていたから、いいなと思った。」と表していた。さらには、「石が本当に割れる道具をつくりたい。」と書き、しゅんたが「本物」にこだわる思いにも、いつきは共感していたことがわかった。

### （iii）教師のかかわりを考える

このように、ふり返りのサークル対話は、自分の活動や思いを見つめ直す、自己評価の場であり、また、他者の思いと出会い、受けとめ、そこから次につなげていこうとする相互評価の場となっている。教師のかかわりとして、まずは、一人ひとりの思いが表されるようなふり返りの場を継続して設けるという環境づくりを意識して行った。自分がこだわりをもって取り組んでいることを表現する場があり、それを受けとめてくれる他者がいることは、安心して活動することにつながると考える。対話の空間を子どもたちと共につくっていくことで、様々な声があがり、子どもたちの活動がさらに広がることも期待した。

また、いつきの思いに寄り添い、これまでの活動の履歴をふまえて「工作」という共通点を見出した教師は、プロジェクトを移動することを意味あることとして見守ることとした。その後、「はっくつプロジェクト」は、あそぶデーに調べた石のクイズや、持っている石の展示に加えて、発掘体験を行った。実際に土の中に石を埋めて、自分たちがつくった発掘道具で掘るもらうことで友達に楽しんでもらい、達成感を得ることができた。このように、関係性の中での子どもの姿をみとり、活動を支えていくことを大切にしていきたい。

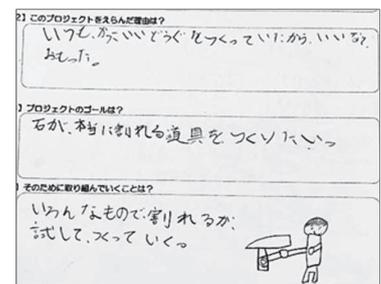
## ②活動から問いを立て、視点をもってふり返る（3年生2学期 社会工作・植物プロジェクト）

### （i）同じプロジェクトの中で他者との異なりとつながりを感じる

2学期も、子どもの興味のあることから様々なプロジェクトが立ち上がっていった。しかし、プロジェクトを選んでいく際、友達と活動している中で、それぞれの興味が重なるものもあれば、「似ているけれど



完成した工作を回して見せる



いつきのプロジェクト紹介シート

ちよつとちがう」と感じたものもあるという声が子どもたちからあがった。そこで、まずはお互いにどんなことをしたいのか、活動を進めながら思いを聴き合う時間を設け、最終的には、14のプロジェクトができていった。その中でも、家族が徳島県の出身であることから阿波踊りに興味をもち追究を始めた子、休日にゴルフに行つて興味をもったゴルフクラブ作りを始めた子、サッカーのエンブレムのかっこよさに魅了され、さまざまなチームのエンブレムを描き写すことを続けていた子は、一人で活動を進めるという選択もあっただろうが、3人で思いを伝え合い、「スポーツ（阿波踊り・ゴルフ・サッカー）プロジェクト」として活動を進めることにした。同じように、「さいほう・ねん土プロジェクト」では、フェルトを使ったキーホルダー作りと、紙粘土を使った食べ物や生き物の形をしたパン作りを2人で分担しながら進めていた。このように、お互いの興味を大事にしながらも、同じプロジェクトの一員として他者とのゆるやかなつながりを持って活動を進めたいという子どもたちの思いが表れるようになってきた。

### （ii）ふり返りの視点をもつ

「社会工作・植物プロジェクト」は、3名の女兒が紙粘土やプラコップ、ストローなどを使って工作をするプロジェクトである。はじめは、「社会工作プロジェクト」の2名と「植物プロジェクト」の1名がそれぞれ活動していたが、1学期も一人での活動となった「植物プロジェクト」のあやねは、他者と共に活動することを希望し、3人で話し合い、合体した。活動の様子を見ると、それぞれが異なることをしている場面もあれば、アドバイスをし合ったり、分担して工作をしたりしている場面もあった。「植物について調べたりその工作をしたい」というあやねの思いは、3人になっても変わらず、紙粘土で花を作ったり、その説明を書いたりすることを続けていた。あやねは、自身の取り組みについて、「一人で取り組むことと大人数で取り組むこと」という視点からふり返った。右図にあるよう、「一人だとつまらないけど、自分の思い通りにはなりません。大人数ではいろいろなていあんがでるし、にぎやかで一人ぼっちでさみしくなくていいけど、（略）言い合いとかけんかが多くなりそうです。」と書いていた。それぞれに良さや難しさがあることはわかった上で、「でも私は、一人の方が自分の思い通りになるし、（略）一人の方にしました。」とふり返る。教師からみると3人で活動していた場面もあったあやねだが、自分のやりたいことや思いがはっきりしていたこともあり、一人で活動していると感じることが多かったのだろう。教師のみとりについても、改めてふり返るきっかけとなった。

こまことて、1人のプロジェクトで、一人だとつま  
 ないけど、自分の思い通りにはなりません。  
 大人数では、いろいろなていあんがでるし、  
 にぎやかで一人ぼっちでさみしくなくていい  
 けど、（略）言い合いとかけんかが多くなり  
 そうです。でも私は、一人の方が自分の思い  
 通りになるし、（略）一人の方にしました。

あやねのふり返り

### （iii）ふり返りを通して、悩みや思いを共有する

さらに、このことはふり返りのサークル対話においてクラスの友達に問いかける形で表され、他の子どもたちにも考えるきっかけとして広がっていった。一人ひとりが、自分のプロジェクトの人数という視点で、その良さや困ったこと、悩んだことを話し始める。5人のプロジェクトで活動していたきょうかは、「大人数のプロは、みんなの意見を聞いたら、『あーこれいいね。』などででてくるかも。」と自分の経験をもとに、その良さをふり返った。けんかが多かったあみは、「二人でいたらけんかになった。こんなときどうすればいいの？」とクラスの友達に問いかけ、解決策を考える場面もあった。

このように、ふり返りのサークルは、それぞれのプロジェクトの困ったことなどを共有することで、同じ視点から活動をふり返る場にもなっていた。子どもたちが自分のことばで活動をふり返り、自己を見つめ直す場としてのサークル対話を今後も継続して行っていきたい。

## （2）第5学年 てつがく創造活動（プロジェクト型学習）

ここでは、子どもの振り返りや活動の姿から個々の変容を追うとともに、自覚的に評価活動をしていく姿を省察していく。2つのプロジェクトの事例を紹介したい。

この学年は、中学年での経験から、ひとつのプロジェクトだけに所属している子どもは少ない。個人でメインプロジェクトとサブプロジェクトの所属を決めて活動していた。しかし、限られた時間で実りある活動になるのかという疑問を教師陣はもっていた。そこで、ひとつだけという制限は設けないものの、自

分が責任を持って活動することができるものに取り組んでほしいという願いを子どもたちに伝えた。

実際、自分の活動を貫こうとするプロジェクトがあれば、からだを動かすことができるから（サッカーや野球ができるから）というプロジェクトも存在しているのは事実である。後者のプロジェクトに対しては、教師の方からそのプロジェクトのゴールを聞いた上で、「習い事と何が違うの？」「クラブチームではできないの？」「なぜこの時間にやるの？」などと問うているのが現状である。活動をやるためのゴール設定（目標設定）、すなわち後付けのものになっていることも否めない。このような姿が毎年見られることから、てつがく創造活動のあり方を研究最終年度として精査する必要性を感じている。枠がないからこそ育まれるものと、ある程度の制約や約束事があることで育まれていくもの、この両者がバランスよくあることが大切である。そのためには、教師の関わりだけでなく子ども同士の考えの交流が新たな気づきをもたらしてくれるであろう。

### ① 音楽プロジェクト（3名）「目標：自分たちでメドレーを作って、聴いてもらう」

音楽が好きな子で結成されているプロジェクトである。3名ともピアノを習っており、3名でのアンサンブル形式を活動の中心に置いている。J-popの音楽を好みそれぞれの嗜好を掛け合わせた表現になっている。また、PC採譜ソフトを使用し、五線譜として残している。

時期	計画	振り返り
6月 7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>PCソフトに転記する</li> <li>練習</li> <li>間違えずに弾くようにする</li> <li>部分練習をする</li> <li>新曲練習→メドレー練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>メドレーに他の楽器（ボンゴ、コンガ、トーンチャイム、マリンバなど）を入れました。曲の雰囲気にとても合っているものを見つけられてよかったです。他の曲も譜読みに入れたので進みました。</li> <li>メドレーをPCソフトに打ち込みました。3人で担当を分けても全く終わらなかったため、打ち込みは諦めて練習したいと思います。</li> <li>ピアノを入れて実際に弾いてみました。でも、曲と曲との間で止まってしまうので次回はその部分を練習したいと思います。</li> <li>前回できなかった部分練習をしました。何回かやると大分できるようになったので、とてもよかったです。</li> </ul>
9月 10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>メドレー完成→練習</li> <li>Adoメドレー練習</li> <li>YOASOBIメドレー作り始め</li> <li>メドレー完成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日は急にひらめいたので、メドレーが1から完成しました。勢いで書き写して完成したので、次回にも生かしたいです。10月の終わりにはひげだんメドレーまで完成させたいです。</li> <li>今週は3つのメドレーが完成していたのでひげだん、Ado、YOASOBIメドレーを練習しました。今、ジャニーズメドレーを作ろうとしているので、頑張りたいと思います。音楽PJの発表までに3つ（4つ）のメドレーをバッチリにしたいので頑張ります。</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽譜入力→練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Adoメドレーを打ち込みましたが、打ち込みが難しかったので完成は延期になるかもしれないなと思いました。打ち込む担当を決めたら公平かなと思いました。来週は担当を決めるところから始めたいなと思います。</li> <li>打ち込みと個人練習を主にやりました。今は、「ひまわり」を修正しているところなので来週には終わりそうです。あと二つのメドレーも残っていますが、完成は見えているのでもう少しの頑張りでいいと思います。</li> </ul>

まず、メドレーにするために曲のつなげ方を試行錯誤している様子が見える。複数の曲をどのようにつなげていくか何度も音を介して試し、相談しながら方向性を考えていった。実際に子どもたちは過去の経験を頼りにするしか術はない。しかし、経験の違う3名がそこには居る。感性の違う3名がひとつの作品をつくりあげていく過程にはそれぞれのよさもある一方でばらつきもあるのが現実だ。その両面をいかに調整し、新しい気づきと出会い、更新していくことが大切なのかを学ぶことができたのではないかな。

また、編曲と演奏、さらには使用楽器等の音色にも意識していく様子が見える。実際に自分の耳で聴いて試して、互いに聴きあうという繰り返しから少しずつではあるが自分たちの音楽が彩られていったのである。

### ② 橋プロジェクト（2名）「目標：橋の構造について知ってもらう→橋について深める・詳しくなる」

活動開始当初は実質1名で活動していた。2学期に入り2名での活動に移行したプロジェクトである。

時期	計画	振り返り
6月 7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>ストローで橋の模型を作って強度の実験結果をまとめる</li> <li>橋に関するクイズ制作</li> <li>豆知識をPCでまとめる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>橋の実験結果についてのスライドをまとめることができました。平行四辺形では上からの力に対して弱いことが分かり、三角形を組み合わせていくことで変形しにくい構造になります。「トラス橋」は三角形になっている。丈夫だから。ということが分かりました。</li> </ul>
9月 10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>仮に橋を架けるならどこに架けるか決める</li> <li>橋をどこにどんな構造にするか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>橋をどこに架けたらいいか、各自でスライドにまとめました。次は歩行用の短い橋をどこに架けるか考えたいです。（構造も）</li> <li>橋のデザインをアプリで描きました。次は工夫点をスライドにまとめ、新しいテーマを決めて活動する予定です。</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>カードゲーム作り（発表準備）</li> <li>発表の準備と練習</li> <li>中間発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カードゲームを作ってゲームをしました。構造と橋の名前をあわせるととても難しくなったので、ルールなどを変更したいと思います。</li> <li>中間発表に向けて他の人にお試しで発表しました。次は発表の振り返りをしたいと思います。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・新テーマ「橋の歴史」</li> <li>・都道府県橋ポスター作り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間発表が終わったので、新テーマを設定しました。私は「橋の歴史」Aさんは「珍しい橋」についてまとめていきます。</li> <li>・それぞれの調べが終わった後で、共同制作で47都道府県毎の有名な橋をまとめたポスターを作ることになったので、アイデアスケッチを少し描き模造紙に書いていきました。</li> </ul>
---	--

初めは、「橋について知ってもらう。」という目標設定であったが、1学期の成果を発表したことにより次なる目標へ更新された様子が分かる。知ってもらった後は、「深める・詳しくなる」というキーワードに変化した。では、どのように深めていくのか。それを2名になった二学期から考え始めている。調べるという活動にとどまらず、自分たちの考える「橋」について深めていく姿があった。ここには、教師の介入もあった。「橋ってなんであるの？」と質問を投げかけ考えさせてみた。さらには、「もし、橋を架けるとしたらどこにかける？」との質問を後日投げかけた。この介入から自分たちなりの橋に向きあう姿勢が変化したようにも捉えている。橋の構造や橋の歴史にも着目し、新たな橋への向き合い方に変化したようだ。2名という少人数ではあるが、互いが持ち寄った材を交流させることで、異なる価値観に出合うことができたからこそ、深まりのある活動へと変化していったのではないだろうか。



教師も一活動者として参加し、適宜声かけをしていった。「こんなこともおもしろそうじゃない?」「なんでこうなってるの?」「本当に?」「同じことやっている人たくさんいるよ。」など、子どもたちに問うたり困らせたりすることから、自分たちの活動を俯瞰的に考えさせた。その子たちなりの更なる探求の切り口を取り入れてほしい願いと、質を高めてほしいという意図があったからである。しかしながら、教師がいくら口出しをしても子どもたちなりのこだわりを持った状態での活動では先のような声かけはひびかないことも多い。「先生はこう言っているけど、私たちはこうやりたい。」という、活動への強い意志の表れでもある。このような姿を大切にしながら活動を続けていくことが重要なのである。大人の声にすんなり流されてしまうようではこの活動の意味はない。自分たちで考え、試し、修正し、さらに深めていくという繰り返しの活動が保証されている環境下だからこそ育っていく能力もある。そして、その営みの中では互いに考えをぶつけ合ったり、折り合いをつけたりする姿があるのだ。そのような価値観の違った他者がいる中で、自分たちの活動をメタ的に捉え直す経験を積み重ねていくことこそこの活動での評価活動である。

教師も一活動者として参加し、適宜声かけをしていった。「こんなこともおもしろそうじゃない?」「なんでこうなってるの?」「本当に?」「同じことやっている人たくさんいるよ。」など、子どもたちに問うたり困らせたりすることから、自分たちの活動を俯瞰的に考えさせた。その子たちなりの更なる探求の切り口を取り入れてほしい願いと、質を高めてほしいという意図があったからである。しかしながら、教師がいくら口出しをしても子どもたちなりのこだわりを持った状態での活動では先のような声かけはひびかないことも多い。「先生はこう言っているけど、私たちはこうやりたい。」という、活動への強い意志の表れでもある。このような姿を大切にしながら活動を続けていくことが重要なのである。大人の声にすんなり流されてしまうようではこの活動の意味はない。自分たちで考え、試し、修正し、さらに深めていくという繰り返しの活動が保証されている環境下だからこそ育っていく能力もある。そして、その営みの中では互いに考えをぶつけ合ったり、折り合いをつけたりする姿があるのだ。そのような価値観の違った他者がいる中で、自分たちの活動をメタ的に捉え直す経験を積み重ねていくことこそこの活動での評価活動である。

### 3 研究のまとめと今後に向けて

実践1では、サークル対話の一部をふり返りの場として位置づけた。教師は、個が表現した思いを友だちが受け止め、活動を広げてほしいというビジョンでかかわった。このことにより、他者と影響を与え合いながら、学びをあむ姿が見られた。これは、関係に基づいた評価活動によって、学びを進めた姿といえる。また、その中で教師も子どもたちの姿から自らをふり返り、次の学びにいかすことができた。

実践2では、プロジェクトにおける緩やかな枠組みの中で学びをあむための手立てとして、評価活動をとらえた。それぞれの経験や価値観の違いにより、自らをメタ的にとらえ直す経験の積み重ねが、自覚的な評価活動につながるということがわかった。教師は、子どもが活動を深めることに気づくような介入が必要というビジョンをもってかかわるが、それに流されず子ども自身がふり返ることこそ大切であると考えた。

このように、それぞれの教師のビジョンに基づいて子どもの活動をみとり、かかわることが、個や集団の「学びとしての評価」を進めると明らかになった。教師も子どもからの情報を受け取り、ビジョンを見直すことが求められる。この繰り返しが、将来にわたり、他者とのかかわりを大切に、自分自身の評価者であることを支えていくと考える。今後、枠組みの在り方は変わるかもしれないが、このような評価の在り方が一層重要になると考えている。

(江部・倉次・佐久山・杉野・前原・町田)